シリーズ 24

AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

世界で活躍できる子供たちのために

日仏文化学院 パリ日本人学校　校長 小野江 隆

ＡＧ５運営指導委員会から「香港日本人学校におけるグローバル人材育成のための探究型学習にかかわるプログラムをヨーロッパ・パリにおいて展開してみませんか」とのお話をいただきました。高度グローバル人材拠点事業では、海外で学ぶ児童生徒がグローバル人材として育つ支援をしています。

パリ日本人学校は、ＡＧ５の支援を仰ぎながら実効力のある研究を進めていくことが、今通う子供たちの未来に大きく貢献するのではないかと考え、世界に輝くグローバル人材の育成に向けて学校をあげて取り組んでいます。

ＡＧ５とパリ日本人学校

香港日本人学校で行われた「グローバルクラス」の実践をパリならではの新しい取り組みとして横展開させるのは可能だと考えました。

その理由は、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的な深い学び」「社会に開かれた教育課程」の実施が、本校において、すでに推進されているからです。さらに、こうした基盤の上にパリならではの視点を加えてグローバルな人材を育成していくことは、日本人学校としてのアイデンティティや独自性を打ち出し、これからの日本人学校の在り方に少しでも貢献できるかもしれないという思いもありました。

研究は、教員が行っていくものですが、まず一人ひとりの教師力と全員参加こそが原動力になります。本校には、それがあったことが本プロジェクト研究を推進させていく上で大きな礎となりました。

ＡＧ５を進めるにあたって

探究型学習の実践は、新学習指導要領が目指すものとほぼ同じであり、本プロジェクトへの取り組みは新学習指導要領の実践と同じ方向性にあります。一人ひとりの教員が単元開発、授業改善、カリキュラム作成を行い、マネジメントすることで、グローバル人材育成のための総括的な取り組みになると考えました。

また、派遣教員にとっては現地の実情を知り、国際人・グローバル人材を育成する教員としての力を身に付けることになり、帰国後の国内におけるグローバル教育の中核となる教員の養成にもなります。そうした教員のモティベーションを高めるのは、他でもない本校の子供たちです。

七月には本プロジェクトを始めるにあたり、海外子女教育振興財団の中村雅治理事長、ＡＧ５運営指導委員会の佐藤郡衛委員長に今後についてご指導いただきました。八・九月には本校の研究推進委員の水野団教諭がアオバジャパンインターナショナルスクール、東京学芸大学附属大泉小学校等を視察して方向性を学びました。十二月にはアオバジャパンの小澤大心先生をお招きし、ＩＢ（国際バカロレア）のＰＹＰ（初等教育プログラム）についてご指導いただいたほか、二月には本校の研究推進委員長である袴塚正之教諭が東京学芸大学附属大泉小学校の発表会に参加し、探究について学びました。

初年度の研究・キックオフ

今年度の研究の大きな柱は、次の四つです。

①本校におけるグローバル人材育成に必要な資質・能力。②探究単元の開発推進のための対話的で深い学びの実現と学級づくり。③単元づくり（探究単元）のためのカリキュラムマネジメント。④汎用性のある小中一貫探究単元の開発（ＩＢの理念を参考）。

まず、総合の時間から探究の時間を生み出し、他教科・行事等との関連性を明らかにするため、教科横断を意識したカリキュラム作成に着手しました。

①についてはＩＢの視点を組み込むことにしました（文科省のＩＢコンソーシアム協力校として支援をいただきました）。

②については、岡健教頭を中心としたＩＣＴ教育の積極的な推進を図り、タブレットや書画カメラ、プロジェクターを活用し、授業効率を高めたほか、様々な授業スタイルを可能にしました。協働的な学びを可能にし、発表の機会を増やすことができました。

③については、すでに学校で実施してきた様々な行事等を効果的に配列し、探究型学習を生み出すための時数や関連性を持たせる工夫が大切になりました。同時にアウトリーチ

を意識し、パリ市やモンティニー市とのコラボを実現することで、人材確保、人脈の新たな構築が可能となりました。年間のカリキュラムを「グローバル人材育成」の視点で俯瞰（ふかん）できる力が大切になるのです。

④は一番の課題です。小学部では「水プロジェクト」を始めることにしましたが、このきっかけとなったのは二〇一八年に来校された皇太子（当時）が四年生に「水」に関する話をされ、子供たちが深く関心を抱いたことです。

また中学部では生き方やキャリア教育を視野に、「フランスと私」をテーマに取り組むことにしました。

研究のスタート

校内研究を基盤に研究主題を「世界で活躍するグローバル人材の育成」と設定しました。

〈理由〉

一　日本人学校・補習校に通う児童生徒はグローバル人材育成のための教育の最前線にいる。

二　探究型学習を推進し、海外ならではの本校の研究を発信する。

三　グローバル人材育成のための研修を深め、帰国後は国内の同教育の中核となる教員を育成する。

〈概要〉

研究Ⅰ（日々の授業改革）

探究の学習がスムーズに進むよう児童生徒の資質・能力を高めるために、昨年の授業改善の研究を継続し、今年度は具体的に「わけをそえて話すことができる子供」を育む授業づくり・改善に取り組む。

研究Ⅱ

授業や学校行事・校外学習・社会見学・施設見学などをIBの観点で考察する（配列、時期、意義等）。

研究Ⅲ

探究型学習活動では総合的学習の時間を核に深い学びを実現させる。

探究単元の開発に向けて

〈小学部「水プロジェクト」実践〉

一　全学年において一人ひとりがウェビングマップ（イメージマップ）を教師の指導のもと作りました。

小一・二年生は生活科の時間に身近な水環境に関心を持つためにフィールドワークを行い、水辺の生き物とのふれあいを通して、水生活に関心を持ちました。また、「水ちょうさたい」を結成し、日常の生活を「水」を視点に調査することで、水の役割や存在に気付くことができました。

二　協働的な学びの中で、クラスの課題として共有するためカテゴリー分けをしました。

三　自分の課題を設定（三～六年生）。たとえば、

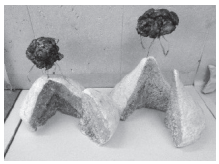
・水の循環の仕組み
・ヴェルサイユ宮殿に水を引くにはどうしたらいい？
・軟水と硬水の違い、味やでき方
・泥水を飲まなきゃいけない国はどうしてあるの？

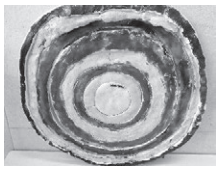
四　自分の課題について、夏休み中にフィールドワーク・調べ学習（自由課題研究）を実施しました。

五　調べ学習でわかったことや新たに生まれた課題を整理しました。

六　調べて探究したことをパワーポイントにまとめ、考察を加えた発表づくりの準備をしました。

七　六年生は、パワーポイントの発表に加え、水をテーマに自分の考えや思いを提言するために、ポンピドゥーセンターの現代アート見学と講習を経て、自己表現方法を学びました。その学習を経て、自己アピール作品に取り組み、アートで表現をするという新たな探究の形を模索しました。


軟水と硬水


水と循環

意見を交換し、考えを深めていく

協力して、発表するための資料作り

１学期

２学期

調査・探求の成果。子供たちの頑張りとやる気がひと目でわかります。この掲示で、さらにモティベーションをアップ！

○体験学習との関連性

子供たちは「水とわたし」を探ることで様々な機関が各役割を果たしていることに気付いていきました。

五年生はOECDの見学を行いましたが、事前に担当官に学校で取り組む「水」の課題と連携した内容に触れていただくようお願いしました。子供たちの飲み水への関心や課題は水道の供給について世界で議論されている事実を知ることになりました。六年生はユネスコを見学、災害にユネスコが大きくかかわり提言していることを知ったほか、水被害や社会の歴史についても触れることができました。

○発表

学級内での発表だけでなく、共通のテーマで隣接学年同士の発表が行われた児童にとっては、大きな刺激となりました。六年生は発表方法を自らが決め、学習計画を立てました。探究につなげるために、学習方法や解決方法、発表方法や提示方法など子供たちで自己演出のアイディアを出し合い、ゴールを見据え、最も効果的な方法を考えました。

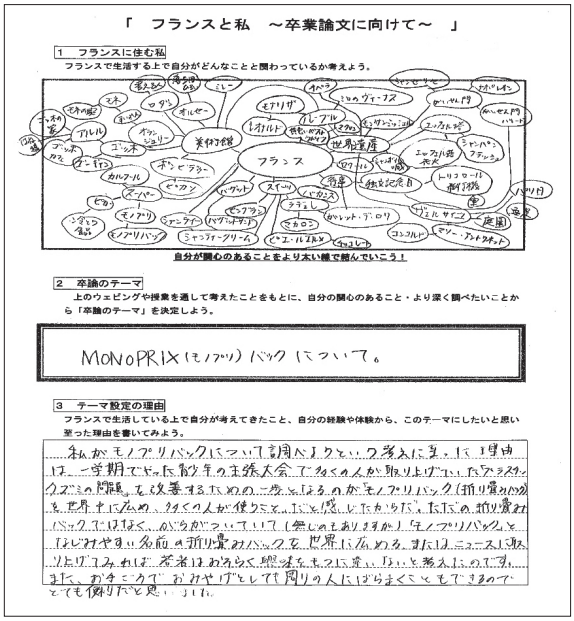
〈中学部「フランスと私～卒論発表会～」実践〉

中学部では、小学部で身に付けた力とフランスで生活していることを生かし、「よりよく生きるための自分の学び」を展開していくことにしました。ゴールを卒論発表会に置き、そこに至るまでの中間発表等で軌道修正等を加える時間も持ちました。

一　ねらいは次の二点です。

・自分自身やまわりの社会について考えることを通して、日本はもちろん、フランスや世界の人々について学び、人として生きる意味を追究する態度を培う。

・各学年で探究的な学習の課程を発展的に繰り返し、課題をよりよく解決しながら、自己の生き方を考えていくための資質や能力を養う。



・集団における自分の役割の意識（各教科、行事等と結び付けて「自己の生き方について考えを深めていく」ための教育活動を展開）。

三　キャリア教育を意識しました。

キャリアとは、生涯の中で自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ねのことです。中学生にとって、今の自分の役割を意識し、それを果たしながら生活することが社会とかかわることになり、そのかかわり方の人との違いが「自分らしい生き方」になっていくのでしょう。多感な時期にフランスで生活していること、その中で経験する様々な立場や役割を十分意識できるようにしたいと考えました。

四　個々にテーマを設定。たとえば、フランスの「食」「働き方」「交通」「歴史と問題点」「ペット事情」など。

次年度に向けて

調べ学習や課題の共有の過程から探究への道筋（フレームワーク等）を含め、一年間のゴールをしっかりと見据えていきたいと思います。

今後は、校内における発表の機会を補習校や現地校（日本語クラス）または近隣の日本人学校へ広げ、ネット会議等を利用し、交流や共同で課題解決（グローバルスクエア）の機会を持ちたいと考えています。

中学部卒論発表会、小学６年生も参観